



## ホーボー — ホームレスの人たちの社会学 上・下

N・アンダーソン著 広田康生訳 ハーベスト社 1999-2000

(シカゴ都市社会学古典シリーズ)

人間科学部教授 広田 康生

1910年代のアメリカは、欧州各国からの移民たちが大量に流入し、シカゴやニューヨークなどの大都市の都心部（特に中心ビジネス区域に接する「推移地帯」と呼ばれる地域）には多様な「移民コミュニティ」「エスニック・コミュニティ」が作られ、多文化、多民族がしのぎを削っていた。彼らの中にはアメリカ社会に適應できる人々と適應できない人々がいた。現代の社会学特に都市社会学は、1910～20年代のアメリカシカゴ大学の移民コミュニティから生じる社会問題の研究から世界中に（もちろん日本にも）広まった。ネルス・アンダーソン著『ホーボー — ホームレスの人々の社会学』は、シカゴ市のこうした社会問題に取り組んだシカゴ大学社会学科（初期シカゴ学派と称されている）の記念すべき第一作目の研究作品であり、その「物語」的な作品構成も幸いして多くの学生、研究者の人気を得た。本書の刊行以来、シカゴ市には、「エスニック・ツアー」のブームが起きた。

大都市推移地帯には「ホーボー」たちの住処である「ホボヘミア」と呼ばれる一角があった。本書の副題から想像されるのとは違い彼らは、今我々が目にする「ホームレス」ではない。彼らは、家郷＝故

郷のきずなを断って移動の中に生きる人々（men on the road）であった。「ホーボー」の中には、渡り労働者としてのホーボーや、自由を求めて移動をする「トランプ」、移動から退き都市に住みつ়く「パン」や「ホームガード」と呼ばれる人々がいた。ホボヘミアには、バーレスク劇場や職業紹介所、レストラン、床屋、教会、公園、下宿屋などが自然発生的に生まれ、彼らは、こうした施設を中心に必要ある時に集まりそして離れ、住んでいなくても、彼らの社会的な集まりが想像できる「コミュニティ」が出来ていた。それはまさに都市的コミュニティであった。

本書のなかでのアンダーソンの事例研究スタイルは、グローバル化のなかで急速に多文化化、多民族化を進める現在の東京の新宿、池袋、横浜などに作られているコリアタウンやチャイナタウン、ブラジル・スポット、イスラム・スポットあるいは都心に隣接する盛り場やカラフルな都市的世界を研究するときに参考になる。

本書は、人が移動し、定住し、多文化を生きる方法と、提起する問題を研究する社会学にとって記念すべき出発点であり、ぜひ一読してもらいたい作品である。